

# 詩とどもり

日本語と教育のしごと

周 郷 博



へ1 日本語のみだれ

貝塚茂樹さんの「諸子百家」(岩波新書)の五章「莊子」のところ、莊子のことばとして「道はみち小成かたよるこころによって存在しなくなり、言葉ははな栄なかにか華ざられて非となる」ということばがでている。今から二千四、五百年もまえの戦国のいわゆる「百家争鳴」の時代に、莊子がいったこのことばは、「古い」でしょうか？ 私には、「古い」どころか、昨日や今日のことばのように、新鮮なひびきをもって身にしみてくる思いがあります。「道」というのは「玄理―原理」のことで、政

治でも、教育でも、幼児教育でもよい、その「原理」のこととしてよいと思いますが、あるいはもっとひろげていって、人生の原理、人生観、「教育の目的」といったものと考えてもよいでしょうか。その「原理」が、「小成」(かたよる心)によって存在しなくなる——私たちの生きかた全体をふりかえてみて、まさに身につまされてハッとする発言です。が、ここで問題にしてみたいのは、第二の発言「言葉ははな栄なかにか華ざられて非となる」という莊子のことばです。私たち日本人のことばは、今や流行語でよくいうあの「最低」です。私が知っている日本詩壇の大先輩のひとり吉田一穂さん(彼は貧乏

で多少変り者ですが)は「こんないやらしい日本語では詩は書けない。詩を書かないからわしは食えない。食えなくともいい、わしは飢え死にする」といった、ということとを、私は人づてにききました。変り者には違いありませんが、私はこの吉田一穂さんの詩人的、人間的貞潔さがよくわかるように思いました。ついでに思い出されるのは、日本文学を研究しているドイツ系のアメリカ人、サイデンステッカーさんがいつか私に言ったことです。岡倉天心(明治時代の末の人)の時代の日本人はよい日本語を話し書いたが、またよい英語も書いた(ニューヨークで、英語で出版した「茶の本」は今でも有名です)。しかし、今の日本人は日本語もいい加減だし外国語もいい加減だ。英語でもドイツ語でも、ひとつの国のことばを理解するということはいいい加減なことではできないのに、今の日本人は日本語もいい加減であるばかりでなく、外国語もアンチヨクにわかるもののように思っている——と。

私たちの日本語は、大正から昭和にかけて「くずれ」かけていたのかもしれない。その時代に「どうかと思う」ということばが流行しだしたのを記憶していますが、すくなくも明治の末期——石川啄木の時代までは「どうかと思う」——

ような自己と民族についての無責任な生きかたはしていなかったに違いありません。「どうかと思う」——は、知的、文化的なふりをした、シンのゆるんだことばでしたが、敗戦前後には「どうしようもない」という、考えてみれば気味のないことばが乱発されるようになって、それは、現在もなおいろいろな機会に、日本人の思考様式のなかに組み入れられているように思われます。私たち日本人の思考のゆるみと責任放棄を大っぴらに表現したことばは、敗戦後のあの「アジャバー」ということばでしょうか。「おもしろい」かもしれないませんが、失敗と期待はずれをこれほど他人ごとのように、投げ捨てるように表現した日本語はめずらしいと思います。

単純に私の推論をいえば、ことば(言語)による「日本人の思考の様式」は、敗戦後のこんにち、まるで解体しゆるみ果てたかと思われまます。まじめくさってみても、たとえば都会のあき地などに「この場所は露天などの出店を禁ず」のたぐいで、どうも坐りがわるい。その昔の「この土堤に登るべからず警視庁」のほうがずっとすっきりしています。

そこへ、世界に類がないほど普及したテレビと週刊紙、デパートなどの宣伝用語が日本中をかきまわして、日本語は根

本的にくずれ、の一端を歩んできたのです。乗物のなかの会話など、くぐりになることばが「スゴイワネエ……」や「アタマへキチャウ……」ということばであるのに気づいている人はかなりたくさんいます。日本人は、もう、そのことばで「考えて」いるのではなく、ムード——気晴らしか取引きをして、ただに過ぎないように思われてくるのです。

## へ 2 詩への期待

日本語のみだれ——について、書いたら一冊の本でも足りないでしょう。が、すくなくも現在の私たちの日本語は、私たちの「思考の中核」を育てていくものとしてはふさわしいものではなく、痛みをもって認めなくてはなりません。そういう場合に、教育はどうなるのでしょうか？ 教育といっても、小学校や高校のことではありません。家庭の幼い子どもたちの教育について言っているのです。その幼い子どもたちまでが、どんなことばを使っているか。子どもたちはその本来のいのちの健康さによってこの世間の異常な日本語のわざわいをはねのけて、詩のような——おとなたち

の世間によごれたことばとはくらべものにならない、一種の主観のロジック（論理）の通ったことばを使ってその経験を語ることがめずらしくありません。まことにけなげです。しかし、すでに五才やそこらで、おとなびて尊大なことばを使って「機械的仕掛けのようなおしゃべり」をして平気になっ

てしまっている子どもたちもかなり目立ちます。テストなどというものの流行、おとなたちの不安、自信のなさ——が、この傾向を悪化させているかもしれません。それは「成長」しているのではなくて、莊子のいう「小成」です。

ところで、詩とはなんでしょうか？ 私は、敗戦直後の混乱のなかで、この私たちの日本の教育や政治、経済までが、日本人が詩をもち「愛する」ようにならないかぎり、ポイエシス (Poiesis——創造) の勇氣をもたないかぎり、望みががない、と考えることができました。詩人の山之口獭さんとも、などかこのことを語り合った記憶があります。

詩とは、もっとも原始的なもので、かつ、もっとも今日的なものだ——と T・S エリオットは言っています。流行のことばを使えば、詩とは下意識 (the subconscious) のことばでしょう。私はこのことについて書くべきことをかなりたくさんもっています。が、ここでは省くことにして、粗末です

が、三つのことだけを書いておきます。

インドの偉大な詩人タゴールはこう書いています。

子どもたちは、意識された知性よりもずっと多くの下意識の心をもってそこが活発にはたらいっている。……この下意識の知性の活動は完全にわれわれの生のいとなみと一つに融け合っている。それは、外部から火を点け手入れをされるランタン（灯り）のようなものではなく、その生命のいとなみによってホタルがその身体に点ける灯りのようなものだ——と。子どもたちは叙事詩に飢えているのに、機械的な知識や暗記を強制される——とも書いています。もちろん、上級になってからのことではなく、幼少な時代の教育について言っているのです。「外部」から「火を点けたり」「手入れ」をし過ぎたりしてその内部の灯を消してしまっているかと思われることがしばしばです。日本人全体がそうなのかもしれない。

もう一つは、九十歳になって人類の平和のためにあの勇氣を示している、イギリスの老哲学者バートランド・ラッセルのことばです。知性、思考力をそだてていくための一つの着眼は緻密さ、正確さをその幼少な時代からどういう方法で育てていくかですが、ラッセル卿は、そのためには、よい詩を

朗唱し、憶えることだ、と書いています。詩——は、ことばの最高の結晶体のようなものだともよいでしょう。その結晶の、それ以外にはあり得ないことばの結合、化合のスタイルを自分のものにするということは、たしかに、下意識（ハートとしてもいい）で受けとっている——そこを土台としてつくられていく人間の思考の中枢を刺戟し、二十億もあるという脳の神経組織を訓練し構成していくはたらきをもつものだと思います。イギリスやフランス、ソ連の一年生の国語教科書をちょっとでも読んだことのある人なら誰でも知っています。詩とその朗読が、教育の初期にどれほど大切なものとされているかを——。

私ははじめに挙げた莊子に立ちもどってみたい。莊子「天下篇」には、人はいろいろな欲望や怒りにがんじがらめになりがちなものだ、といって、こう書かれています。「怒りの感情をとめるには詩が最上であり、憂を去るには音楽がよく、音楽を調節するのは礼である。」と——。

いちおうこの書き足らぬ文章に結末をつけましょう。

私は、子どもたちも、お母さんやいっばんのおとなたちも、ことばが「素通り」してけっして思考として深まりそうもないひどいおしゃべりになった戦後の特殊状況について考えてみているのです。イギリスの注目される脳の研究者グレイ・ウォルターの「生きている脳」という本の最後の章はほとんど教育論ですが、彼は、「脳の生理」についても、経済学でいわれているグレシャムの法則（悪貨は良貨を駆逐する）にあたるものがあるといつて「半解な知識は完全な理解を駆逐する」ということばをかかれています。ほんとうの理解から遠ざかるばかりではなく、脳の細胞が完全に能動的に働らかなかつたことからくるノイローゼとその余波のことも考えておこなうてはなりません。どもり——は器官に欠陥があるからこそ、その障害を越えるために自分をコントロールする努力を通してことばを発するほかない。なんの抵抗もなく発せられるおしゃべりのなんとうつろなことから。私は、幼少な時期に、人間がさまざまな人間的な抵抗を突き抜けて結晶体のようになった詩を教育のしごとのなかへ持ちこみたい。産業革命が最初に起つた国であるイギリスでは、テレビ（日本ほどに普及してはいない）の弊害をなくすために、さ

すがに、家庭で親と子が詩の朗読をやるという運動がはじめられていゝる——。と同時に、母（父も）や教師が、幼い子どもたちとともに、「人間的な抵抗——悩みと喜びを通つてきた、自分自身のことば」——詩をもちたい。

イギリスでもソ連でも、他の国々でも詩の朗読がいっそう重んじられ詩人は大事にされている。国民、民族の誇りとされていゝるが、それは、その国のことばによって国民の思考の基本を「つくつていく」ものだからです。幼い人々にとっての「ことばのしつけ」の基本です。私たちの国には、明治はいざ知らず、コマージュシャルはさかんだが、詩も詩の朗読も無視されている。どもり矯正の学校だけで「詩の朗読」のような日本語の訓練がやられているだけです。どもりは「まだとどかない」器官の欠陥をもつ人々ですが、ちゃんとことばの言える人たちの「他人志向的な行き過ぎ」を「抑えて」みたら、そこに詩が（詩とはいわなくとも）——そうして自分自身の思想が生れてくるように私は思います。その「文化的息吹き」（タゴール）のなかでこそ、教育は息を吹きかえしてくるでしょう。

（お茶の水女子大学）